

## ■ 書 評 ■

園田英弘／濱名篤／廣田照幸著

## 『士族の歴史社会学的研究—武士の近代—』

大分大学 山岸治男

もし、読者が人間・社会・歴史……等に少しでも関心を持つなら、本書はその関心を魅了してやまないだろう。では何が魅了するか。一つは本書が扱う問題・課題であり、もう一つは駆使した方法とそれによって導き出される斬新な結論である。こう記すと、剣豪の道場破りを印象づけるかも知れないが、実際の論述にあたっては先行研究の丁寧な吟味、あつた資料のきめ細かな分析、分析を通して結論できる命題と命題化するにはなお検討の余地を残す内容の厳密な区分けなど、謙虚な姿勢が貫かれている。

内容は次のように構成される。序章で問題意識・研究方法・研究の意義等についてふれる。以下、各論として、明治前半期における旧武士集団の解体と社会移動を第Ⅰ部（1～3章）で、また「解体・移動」が通婚や相続などの家族レベルでどのように進行したかを第Ⅱ部（4～5章）で、さらに、そうした変動過程における士族の社会移動と教育機会の関係を第Ⅲ部（6～9章）で扱う。全体を貫くのは、士族の社会移動を素材に、近世から近代への歴史の移行を、連続・断絶（非連続）の両視点から再検討する作業である。それによって、俗説はもちろん、通説をも洗い直そうとする強い意欲が示される。その際、評者の関心をよぶのは、

3氏が社会移動を単に社会的地位・役割の達成（または失敗）というハードな側面からだけでなく、それに伴う社会移動者（本書では士族）の社会意識（成就感や喪失感などの内面状態）にまでたちいって論述しようとした点である。

では、どんな課題が設定され、どんな方法が使われ、どんな結論が出されたか。それはどんな意味あいでの斬新なのか。

まず、序章の中ほどで園田氏が「われわれにとって見逃すことができないのは、武士層のある部分は、自己変革を通して、新しい社会集団として明治に生き延びたということである。以下、今まで不当に無視されてきた、武士の『上昇転化』の側面を見ておこう」（22頁）と述べ、武士は没落したとする通説に挑戦する。これを受け、第1章では、明治社会に、それもかなりの部分が「優位に生き延びた」旧武士層において、「何が媒介要因となって社会移動の優位性を導き出したか」（51頁）、その媒介要因の解明に問題の焦点をあてるべきことが論じられる。

第2章、第3章は、士族の「自己変革」が通説とは逆にかなり順調にすすんだことを実証する。その背景としてあげられるのは、武士がその身分に包みこむ形で

持っていた「職分」観が明治以後に発生する近代的諸「職業」への横すべりを可能にした点である。逆にいえば、これに失敗した士族が、通説どおり没落を余儀なくされたことになる。

さらに第6章～第8章にかけて、社会移動の優位性を導き出した媒介要因の重要な一つとしての学校を検討する。この検討から、学校が最初から職業へのチャンネルであったのではないこと、通説とは逆に、士族は学校教育機会をかなり優位に活用し得たこと等を次々と実証する。

これら各章で特に注目すべきは、第4章、第5章でもそうであるが、同じく「武士」ないし「士族」として一括されやすい旧武士層を、さらに上層と下層で異なる対応があったのではないかと仮説して行う分析のきめ細かさと鋭さである。サンプルが少ないと評するむきもあろうが、ここはむしろ、資料的拘束の多いなかで、まれにみる優れた分析だと評すべきである。統計数値の使い方についても、「占有率」が持つ弱点をつき、むしろ「輩出率」のほうが妥当であることを指摘し、何点かの著名な先行研究の結論に修正をせまっていく(85頁)。

こうして、社会制度の変遷をたどるだけでは容易に観察・洞察し難い明治前半期の士族の社会移動、およびそれを方向づけた政治・経済の動態と士族各層の心的・精神的葛藤・思索の相互作用(交渉・確執)が、著作全体を通してリアルに浮き彫りにされるのである。特定の「史観」を先取りしてしまうのではなく、資(史)料を丹念に調査し、資料から仮

説や結論を導く手法を貫いた点に敬意を表したい。こうした研究姿勢が、例えば「現代のわれわれにとっては、岩村における明治7(1874)年の下等小学を修了した士族の多くが学齢を大きく上回った人々であったことは驚きである。……われわれは、『学校』という『教育の場』と反射的に連想するが、明治初期の学校は果たしてそのようなイメージだけでとらえられていたのであろうか。……彼らにとっては自らの(小学訓導になることのできる)『能力証明』もしくは『資格付与』の場……として学校をみていたとも考えられる。……当初のこうした利用が、結果的に地方レベルでも多くの国民に、学校の地位形成機能を明示的に示したのではなかったのか」(317頁)等の発見ないし推論を可能にするのである。

ところで、本書はあえて「歴史社会学」と銘打って世に問うた著作である。そこには、これまでの歴史学の成果に対して、謙虚ではあるが、かつ「歯痒さ」を感じている様子が垣間見られる。本書に歴史学や社会学を本職とする人々が目を通すなら、必ずや教育社会学からのかなり大きな刺激剤を自覚するにちがいない。

最後に、蛇足になるが、主として農村をフィールドとし、農民を研究対象としてきた評者にとって刺激を受けた点を記したい。それは通説では、多くが大正期までに没落したとされる農村の旧中層地主の近代および現代を、あらためて検討し直す必要があるかも知れないと自覚させられた点である。

◆A5判 354頁, 5665円  
名古屋大学出版会